平成２２（２０１０）年５月２５日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．１０

発行　南極 OB 会
会長　川口貞男
編集　広報委員会

目　次

表紙写真　南極授業風景（昭和基地）・・・　１
南極を教育に　南極授業ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ開始・　２
「南極授業」実現まで　本吉洋一　・２
教員南極派遣ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに参加して
森田好博・・３
「南極授業ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」に参加して
長井秀子・・３
50、51 次帰国隊員歓迎会開く・・・・・・４
門倉昭５０次越冬隊長報告・・・・・５
本吉洋一５１次隊長兼夏隊長報告・・５
土屋範芳ｾﾙﾛﾝﾀﾞｰﾈ調査隊長報告・・・６
南極ＯＢ会総会ミッドウィンター祭、
第５回講話会６月１９日(土)に開催・・・６
第４回「南極の歴史」講話会・・・・・・７
「南極観測と報道」
「何でもﾆｭｰｽになった時代」深瀬和巳・・７
テレビは南極をどう伝えたか　隈部紀生・８
彩った人々と今後の課題　柴田鉄治・・・９
南極関連情報・・・・・・・・・・・・・１１
旧しらせ“第二の船出”
連載「時は巡り」⑦
第１次越冬隊の通信を担当して
作間敏夫・・・・・・１１
南極関連施設・記念碑等の紹介
白瀬南極探検隊記念館の紹介
石船清隆・・・・・・１３
連載「支部便り」⑦沖縄支部報告・・・・１４
会員の広場　受賞、会友承認、訃報・・・１５
広報委員会からのお知らせ・・・・・・・１６
第４回講話会の講師陣の写真・・・・・１６

日本の南極観測史上初めての試みとなる現職教員による南極授業が合計４回実施された。写真は平成２２年２月６日の授業風景である（右から森田好博先生、長井秀子先生、本吉洋一５１次隊長）。昭和基地(南極)の食堂をスタジオにして、日本科学未来館(東京)、アサコムホール(大阪)を結んだ３元中継でおこなわれた。

南極を教育に

南極授業プロジェクト開始

―５１次隊から、現職教員２人、昭和基地へ―

４代目の南極観測船、新「しらせ」の就航で、観測隊員・同行者の収容人員が大幅に増えたため、それを活用してかねてからの懸案だった「南極を教育に」計画の第一弾、「南極授業プロジェクト」が５１次隊からスタートした。全国から公募した現職の教員を昭和基地に派遣し、南極から日本の子どもたちに向けて授業をやってもらおうという趣向である。スペースシャトルに現職教員を搭乗させた「宇宙授業」の、いわば南極版であり、それによって南極観測に対する国民の理解や関心を高めるだけでなく、「地球の未来」を担う次世代の人材育成にも寄与することをねらいとする。同時に、このプロジェクトを続けることによって、全国の教育現場に南極経験のある教員が増えていくことによる事後効果にも期待している。

初年度の５１次隊には全国の応募者のなかから選ばれた奈良県立奈良高校の森田好博先生と千葉県習志野市立大久保小学校の長井秀子先生の２人が選ばれ、昭和基地からそれぞれの学校や日本科学未来館などに南極授業をおこない、多くの子どもたちに感銘を与えた。

「南極授業」実現まで

第５１次観測隊長　本吉　洋一

「現職教員を南極に派遣し、現地から南極授業を行う」・・・言葉にするとこれだけのものを実現するために約３年を要しました。事の発端は、２００７年に極地研に立ち上がった「広報戦略タスクフォース」の提言でした。その中に「教育の分野に南極を」という項目が付け加えられ、そのための施策として「教員による南極授業を実施する」、という方針が打ち出されました。当時私は極地研の極域情報および広報担当副所長の職にあり、また広報室長も兼務していました。自分が中心になってまとめた提言は、自分の責任で実行するしかありません。はて、どうしたものかと思案に暮れていた時、朝日新聞ＯＢで、第７次、第４７次隊に同行者として参加された柴田鉄治先生が強力なパートナーになってくださり、このプロジェクトが動き出しました。とはいっても、どこから手をつけたらいいのか皆目見当がつきません。教員の人事にかかわることだから教育委員会？いやその前に文科省のしかるべき部署？南極観測にも関係するから本部事務局？私立の場合は？募集はどうする？と、たくさんの？を抱えながらのスタートでした。とりあえずの第１球は、本部事務局である海洋地球課の丸山修一課長補佐に投げました。丸山補佐は、このプログラムに理解を示した上で、地方教育委員会に問い合わせるとともに、省内の初等中等教育局に説明に回ったりして下さいました。その結果、実施した場合の問題も浮かび上がってきました。一つは参加する教員の身分と派遣にかかる費用です。これは、極地研サイドで解決しなければなりません。「公募をしても、誰も応募しないのでは？」と冷ややかな見方をする教育委員会もありましたが、そんなことを気にしている余裕はありませんでした。

年が明け、２００９年に出発する第５１次観測隊の隊長に本吉が指名され、新船「しらせ」になって大幅に増えた同行者枠を使って教員を派遣すること、このプログラムは極地研のアウトリーチ活動と位置づけ、極地研が派遣にかかる経費を負担すること、が決まり、実現に向けて大きく一歩前進しました。次のステップは公募です。できれば、全国の教員に周知したい。でも、すべての小・中・高校に募集要項を送るのは不可能です。はてどうしたものか。ここでも、丸山補佐が助け舟を出してくださいました。

教員の海外派遣を扱っている筑波の独立行政法人教員研修センターを紹介してくださり、募集のノウハウについてアドバイスをいただきました。また、私立学校への周知については、日本私立中学高等学校連合会の福島康志事務局長へのお願いにも同行してくださるなど、本当に親身に心配していただきました。おかげさまでようやく公募に漕ぎ着けたものの新年度に入ってしまい、果たしてどれだけの応募があるか、疑心暗鬼の部分はありましたが、１８名の応募者の中から森田好博先生と長井秀子先生を選考することができました。その後の経緯は省きますが、お二人は身体検査を無事パスして第５１次隊に同行者として参加することが正式に決まり、また、派遣にかかる経費は日本極地研究振興会から援助していただくことになり、「南極授業」実現の運びとなりました。

今回、昭和基地から合計４回の南極授業を行うことができましたが、やはり現職ベテランの先生だけあって、授業の組み立てが実にお上手でした。日本の子供たちに与えるインパクトも相当大きかったと思います。このプログラムは第５２次隊でも実施する予定です。引き続き、ＯＢ諸先輩のご支援をお願いいたします。

教員南極派遣プログラムに参加して

奈良県立奈良高等学校　森田　好博

今も瞼を閉じれば、南極大陸のラングホブデやリーセルラルセンの海岸より屹立する大岸壁、或いは、しらせ氷河の青白い光景がよみがえってきます。と同時に、湖沼のほとりに佇んだ時の絶対的な静寂感、そして香りや匂いの無い不思議な世界に生きる野生の生物たちを思い出します。それらの地を訪れた時、何億年も前からこのようなどっしりとした空間があったのだろうと思いを馳せました。

昭和基地では、お正月や豆まき、餅つきなど、季節の節目には、日本古来の行事がありました。みんなで大いに楽しみ、一人ひとりを大切にして、誰がどのような仕事をして、皆のために働いているかが誰の目にもはっきりと見える古き良き日本の「昭和」がありました。

自分にとって、南極での体験が、今後の自分の生き方にどのような影響をもたらすかは、まだよく分かりませんが、日本での生活が南極の環境にどのように関わりを持つかを考える一刹那が常にあることでしょう。衣類を含めて、１箱のダンボールに収まる荷物で２ヶ月生活した経験を考えますと、モノにあふれている今までの自分の生活を見つめなおし、美しい自然や四季折々の日本の風景や文化遺産を未来の世代に残していく責任があるということも再認識しました。休みの日には、空を観察したり、山に登ったりして写真を撮影する。そんなシンプルな生活に戻りたいと思います。

今後は、南極授業の準備で得られた貴重な体験や自身で撮影したクマムシやプランクトンの顕微鏡写真、南極の自然の写真を日々の授業に活かしたいと思います。また、地元の科学ボランティアとして、「青少年のための科学の祭典」や「けいはんな科学のまちのこどもたちプロジェクト」或いはきっづ科学館での「マンスリー実験工作教室」などで、子供たちや保護者の方々にむけて南極を題材にした実験や工作を交えて、南極大陸や南極地域観測隊の活動の紹介をさせていただくことを予定しております。

南極授業のあと、本校の生徒が「南極地域観測隊員になって、いつか自分も南極へ行ってみたい」と述べていた旨の新聞記事を拝読してうれしく思いました。また、日本科学未来館への中継では卒業生がtwitter を通してリアルタイムにエールを送ってくれたりと、自分でもその反響の大きさに驚いており、「南極の今を伝えること」の重要性も学んだ気がします。　最後になりますが、今回、私の南極への夢を叶えてくださった本会の皆様、国立極地研究所の皆様、奈良県教育委員会の皆様に厚く感謝を申し上げます。

「南極授業プロジェクト」に参加して

習志野市立大久保小学校　長井秀子

昨年５月、「南極から授業をする先生募集」という新聞に載った小さな記事。これを偶然見つけた瞬間から、私の「南極授業」は始まりました。

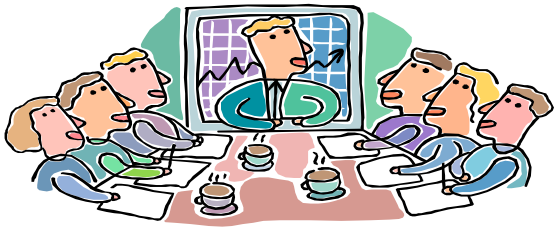
南極観測隊の予備知識もないままに同行

した私にとって、見るもの聞くものすべてが新鮮で、刺激的でした。なるべく多くを日本にいる子どもたちに伝えたい。どうすればそれができるだろうか。その答えは、なかなか見つけられず、今も私を悩ませ続けています。「とにかく考えていても始まらない。面白いと思った事は、なんでも体験してから考えよう」と、行きあたりばったりの私の授業準備が始まりました。そんな私に観測隊員の方たちはもちろん、しらせ乗員の方々も親切になんでも教えて下さいました。そして、言葉にしなくても皆さんの「先生、しっかり子どもたちに伝えて下さいね」という声がいつも聞こえてくるのでした。

さて、そんな多くの人に支えられた私の「南極授業」でしたが、どうだったのでしょうか。自分では、思っていることの半分も伝えられなかった気がします。私が伝えたかった事。それは「今、ありのままの南極、南極っていうところが地球にはあるんだ。すごくきれいで、大切にしていかなくてはいけない。なぜならそこは、厳しい自然の中で生きものたちが一生懸命生きていて、日本では見られない自然現象もたくさんあって、それを研究している人がいて、それらを研究することはこれからの地球の未来を考えるためにとても大切なことだから」また、「それらを支える人も掛け替えのない南極を大切にするために働いている。南極を大切にするということは、地球を大切にするということ」でも、その目標が何度となくわからなくなってしまいます。そのたび、「今のありのままの南極を伝えればいいんだ」と自分自身に言い続けました。

日本で聞いていた子どもたち、私以上に南極に対してまっ白で何の予備知識もない上に、生活経験や一般常識もまだ備わっていないまっ白な心の子どもたち、彼ら、彼女らに南極の今、そして未来へ向けての大切さをわかってもらえたでしょうか？答えはすぐには出ないかもしれません。ちょっとずるいですが、そういった意味も含めて私の「南極授業」の成果を問うのはもう少し先にして頂きたいと思っています。

日本に帰ってから子どもたちへの第一声は決めています。「南極、楽しかったよ！」



50、51 次帰国隊員歓迎会開く

―新時代らしい新方式の報告会―

第５０次越冬隊と第５１次夏隊の帰国報告会と歓迎会が、国立極地研究所主催で、新「しらせ」が無事帰港した４月９日（金）の夕方、東京･港区元赤坂の明治記念館で開かれた。新「しらせ」就航という新たな時代を迎え、今回からこの会も形式を整え、報告会を独自に設け、報告会の会場は椅子をたくさん準備して多くの人に「南極観測の今」を聞いてもらうようにし、会場入口では各隊の「概要」を記入した紙を配った。歓迎会は、別会場で、これまでの方式で賑やかに開催された。

報告会は午後４時半から６時までの１時間半開かれ、冒頭藤井理行極地研所長は「新しらせによる新しい時代を迎えるにあたり、なるべく多くの人に聞いてもらいたいと思い、報告会を設けやり方を少し改めてみたい」と挨拶した。次いで門倉昭５０次越冬隊長、本吉洋一５１次隊長、土屋範芳セールロンダーネ調査隊隊長の３氏が報告した。

ここでは報告の中から「観測隊の昨今」を紹介する。

門倉昭 50 次越冬隊長報告

新砕氷船の建造が間に合わず、オーストラリアのオーロラ・オーストラリス号で２００９年1月、昭和基地に行った。構成は夏隊１８名、越冬隊２８名、計４６名、それに同行者１名であった。このうちセールロンダーネ山地調査の夏隊６名は航空機で派遣した。

定着氷縁からヘリ３機で人員と物資を昭和基地に空輸した。物資は約９０トンだった。

越冬中の気温は、最低－３８.５℃、最高＋６℃、平均－１０.２℃で、平年並みだった。２月に４７.４ｍという過去最大風速を記録した。ブリザードの多い年でＡ級が１３回、過去タイ記録。太陽活動の極小期で、オーロラ活動が静かな年だった。

CO_2濃度の上昇傾向はそのまま､メタン濃度も上昇傾向が維持されている。

史上初の「極中間圏雲」（夜光雲）の観測に成功した。中間圏の低温化が進んでいる。

国内とを結んだテレビ会議システムによるイベントは４３回に達した。

越冬中の８月２３日に行なわれた衆議院選挙に２３名がＦＡＸで投票した。

昨年１１月５日に成田を空路出発した５１次の先遣隊５名が、小型機で１３日に昭和基地に着いた。氷上整備などをして迎えた。

本吉洋一 51 次隊長兼夏隊長報告

５１次隊は新「しらせ」の最初の隊。夏隊３４名（観測２４、設営１０）、越冬隊２８名の６２名で構成、うち女性９名。新船ということで同行者が多く２３名で、計８５名。同行者のうち外国からは７名。国籍は韓国、タイ、ベルギー、南ア、オーストラリア。報道関係は５名だった。

５１次隊の特徴

○新「しらせ」が就航し、輸送手段が大きく変わったこと。
○航空ネットの利用が進んだこと。
○同行者が増え、多様な観測形態、多角的な情報発信になったこと。
○夏期の野外観測が拡充されたこと。

出発･帰国の多角化

航空機の発達があり、出発も帰国もまちまちだった。

２００９年１１月５日、先遣隊（夏隊２名、越冬３名）が成田出発（１３日昭和基地着)。

１１月１０日、セールロンダーネ隊１０名成田出発（２０日着)。

同日「しらせ」東京港出港、初航海へ（同行者中５名乗船、他は本隊と出発)。

１１月２４日、本隊成田出発、オーストラリアのフリマントルで「しらせ」に乗船、同月２９日、南極へ向かった。

帰りは、２０１０年月中旬にセールロンダーネ組の一部などが空路成田に帰国した。本隊は同年３月１７日に「しらせ」がシドニーに入港して下船、１９日に成田に帰国した。「しらせ」は、４月９日に東京港に帰国した。

新「しらせ」苦闘

１２月１６日に基地北方の定着氷に着いて基地へ隊員などを送り込んだ後、セールロンダーネの隕石隊要員を送るためクラウン湾に向かい、任務終了後２８日に再び基地北方に戻り、進入を開始した。

ところが今年の海氷は厚く､初登場の「しらせ」は苦労した。大晦日までは順調だったが、正月に入って難航した。例年は２ｍ程度の海氷が、今年は４ｍに達し、その上に２ｍほどの積雪。３００ｍバックして前進しても１０ｍほどしか進まない。新しらせの船首に装置された新兵器「融雪散水装置」も奮闘した。海水を船内のタンクに入れ、船首にずらりと並んでいる噴出孔から一斉に放水し、前方の雪を溶かしたり、ぐずぐずにしたりする。1分間に２５０トン、学校のプールぐらいの水を一気に噴水する。

接岸不能か、その時はどう対応するか、と心配した時期もあった。しかし小梅三津男艦長以下の頑張りで1月１０日夜、予定より少し遅れたが、昭和基地そばに接岸できた。来年も状況は厳しいのではないだろうか。今回のラミング（昔のチャージング）は３４１４回、３３次の４４４１回に次ぐ歴代２位だった。

新輸送システム

荷物を緑色のコンテナに詰めて船積みし、氷上に降ろして雪上車で基地に運ぶ。見晴らし岩近くにコンテナヤードを造って、雪

上車で着いたコンテナの荷物を出し、ここから基地内の届け先に車で運ぶ方式。ドラム缶は４本まとめてパレット化した。今年のように海氷が硬い時は、この輸送システムは有効だ。

チャーターしたヘリが活躍

夏季の観測用に小型のヘリコプター１機をチャーターして持っていった。パイロットもクルーもオーストラリア人で、「しらせ」に小型用の格納庫が用意されていた。観測用に随時飛ばせて、とても効率的だった。

ドームふじ基地に派遣

・浅層氷床掘削を実施、１２２ｍに達した。
・氷床コア８トンを持ち帰ってきた。
・将来天文台を作るための下調べをした。

夏季設営

接岸の遅れによる影響が若干出た（内容は省略）。

南極授業

先生が２人来て、テレビ会議用システムを使って日本向け「南極授業」を４回実施した。

中国の基地訪問

帰途２０１０年２月２６日に中国の中山基地を訪問した。ロシア、オーストラリア隊も着ていた。３階建ての建物など基地は大きくなっていた。３階はバスケットボールができる体育館だった。

土屋範芳ｾｰﾙﾛﾝﾀﾞｰﾈ調査隊隊長

地形、地質、隕石の３つの調査隊が、国際協力の多用な手段を使って、現地入りした。３つの隊合わせて１６名、それにベルギー人１名だった。

この地域は、昭和基地の西方約６００キロ、ブライト湾の南役２００キロの辺りで、東西約２００キロ、南北約１００キロの、四国くらいの面積だ。

往復とも飛行機だと出張期間９８日中現地に８６日、飛行機としらせを組み込むと出張期間１３０日で現地に７９日、など往復のアクセスは多様であり、効率も多様である。

隕石採集を２０年ぶりに再開した。最大５キロのものを見つけた。今回は６３５個という成果を上げることができた。これまでの１６２０１個に６３５個の追加である。（老人のメモ採りですから、間違いがあるかもしれません。その時はご勘弁を。深瀬）

南極ＯＢ会総会、６月１９日（土）開催
ミッドウィンター祭、第５回講話会も

２０１０年度の南極ＯＢ会総会、ミッドウィンター祭、第５回「南極の歴史」講話会は、６月１９日（土）午後２時から東京・千代田区一ツ橋１－１－１、パレスサイドビル９階の株式会社アラスカ・パレスサイド店（℡０３－３２１６－２７９７～８）で開催される。

日程は、１３時３０分から受付開始。

（１）第５回「南極の歴史」講話会、１４時～１５時１０分
（２）２０１０年度南極ＯＢ会総会、１５時２０分～１６時
（３）ミッドウィンター祭・　　１６時２０分～１８時

講話会は一般公開で（無料）、題目は「南極氷床について」、講師は芳野赳夫電気通信大名誉教授（３次、１７次冬）、西尾文彦千葉大教授（１７、２３次冬、４３次夏）の両氏。

ミッドウィンター祭参加費は６千円。

参加申込の方法などは同封の「ご案内」をご覧下さい。

第4 回「南極の歴史」講話会

「南極観測と報道」

第４回「南極観測と報道」講話会は、２０１０年２月２７日（土）午後２時から東京・千代田区神田駿河台の日本大学理工学部１号館で開催された。一般参加者４５人を含め約１００人が参加した。

今回のテーマは「南極観測と報道―敗戦後の国民を奮い立たせた夢とロマン」。南極報道に携わった元共同通信記者深瀬和巳氏、元ＮＨＫ記者隈部紀生氏、元朝日新聞記者柴田鉄治氏が講演した（講師陣の写真は本会報の末尾に掲載した）。

「何でもニュースになった時代」

―「宗谷」「タロ・ジロ」―

第３次報道担当隊員、第７次同行記者
深瀬和巳氏（元共同通信記者）

「宗谷」時代の報道協定

日本の南極観測事業にとって、１９５５年（昭和３０年）は、重要な節目の年である。

ＩＣＳＵ（国際学術連合会議）が１９５７年に、第３回極年（国際地球観測年＝ＩＧＹ）を１９５７年から１９５８年にかけて実施することを決め、日本も参加するため準備を始めた。この時南極地域は観測の対象になっていなかったが、ＩＣＳＵは１９５５年１月になって、南極地域を観測の対象に加えることになり、９カ国が直ちに参加を表明した。

日本はどうするか、朝日新聞の強い支援表明もあり、ブリュッセルで９月に開かれた南極会議で日本は参加を表明、プリンスハラルド海岸での観測を要請された。これを受けて日本学術会議茅誠司会長が国民の協力を要請する談話を発表、朝日新聞も「全社を挙げて協力する」との社告を出し、１１月４日の閣議で日本の参加を正式に決めたのであった。

南極観測参加への動きは各新聞社が大きく報じ、未知の大陸に挑む壮挙に、国民の関心は急速に高まった。報道機関も記者の派遣を熱望するようになった。そこで日本新聞協会で検討した結果、概略次のような報道協定をまとめた。①朝日新聞、共同通信から各１人の記者を派遣する②文相はこの２人に「隊員」を委嘱し、国家公務員の身分になる③プール原稿のほかに朝日新聞用に特別枠の記事・写真を認める④文部省内に「南極記者会」を新設し、報道の円滑化を図る。――

この制度によって、「宗谷」時代の第４次隊まで計８人が「隊員」として南極に向かい、７次の「ふじ」以降は、自由な「同行記者」制度に変わり、現在に至っている。

１９５６年秋に「宗谷」は第１次隊を乗せ東京港を出港、オングル島に「昭和基地」を建設し、１１人の越冬隊を残すことができた。帰りに海氷に阻まれ、ソ連（当時）のオビ号に救出されたが、概ね順調で、南極からの報道を国民は待ちわび、一喜一憂しながら日本隊の活躍に声援を送った。

ＩＧＹの中心となる第２次隊は「本観測隊」と呼ばれ、満を持して昭和基地に向かったが、手前で海氷に挟まれ身動きできなくなった。米国のバートンアイランド号の救援を受けたが打開できず、１次の越冬隊を小型飛行機で辛うじて救出しただけで越冬を断念せざるを得なかった。心ならずも１次の越冬隊と共に活躍した１５頭の犬を基地に残したままの撤収だった。国内だけでなく外国からも厳しい非難を浴びることになった。

「タロ」「ジロ」生存のなぞ

この経験から３次は「宗谷」をヘリ空母に改装、空輸方式を成功させた。１番機は

２頭の犬の生存を発見、タロ、ジロの兄弟犬だと分った。私はこの３次の隊員として参加し、この大ニュースに遭遇した。日本国内はもちろん世界中でこの話題で沸き立った。

しかしその後がたいへんだった。「何を食べていたのか」「どんな生活をしていたのか」「ほかに生存犬はいないのか」との問い合わせが殺到した。犬の言葉が分らない私は、タロ、ジロの前で「話ができればなあ」と困惑したのだった。

映画「南極物語」では、高倉健が扮する隊員に、氷原の彼方からタロとジロが一目散に駆け寄ってくる名場面が感動を呼んだ。しかし１次越冬で犬係りをし、３次隊で再び昭和基地に来て、生存していた２頭の犬がタロとジロだと確認した北村泰一隊員は、実際は映画とは違っていたと言う。基地に着いた北村隊員に、２頭の犬は警戒して後ずさりをした。北村隊員が黒い犬の名を次々に呼びかけたが反応がなく、当時子犬だったタロとジロの名を呼んだとき、しっぽが振られ、後は映画のように抱きしめ、再会を喜んだのだそうだ。

当時テレビは誕生したばかりで、新聞とラジオの時代、頼信紙にカタカナで原稿を書き、通信士にモールス信号で送ってもらっていた。見たもの、聞いたもの、体感したものがすべてニュースになる南極報道の黎明期だった。

テレビは南極をどう伝えたか

―‘７９年に基地から初の生中継―

南極点で９次隊到達を取材
隈部紀生氏（元ＮＨＫ記者）

日本で最初の南極観測船「宗谷」が出港した１９５６年１１月は、日本のテレビ放送が始まってまだ３年余りのときだったが、南極観測が国を挙げての大事業だったため「宗谷」の出航式はテレビで生中継された。しかし「宗谷」の時代に南極観測に同行したのは新聞、通信社、映画の人たちだけだった。１９６５年に南極観測が再開されて、第７次隊の「ふじ」に同行して１６ミリフィルムで取材し、帰国後初めてテレビ番組で昭和基地の様子を伝えた（以下一部映像、画像を使用）。民放も９次隊から同行を始めた。

日本の南極観測の初期の大きな目標は昭和基地から南極点まで陸路往復５，２００キロの極点旅行だったが、報道陣の同行は認められず、朝日、共同、ＮＨＫの３社が南極点のアメリカの基地に先行して旅行隊の雪上車を待ち受けて取材した。このときの映像は旅行隊の隊員が撮影した８ミリフィルムの映像とともに１９６９年１月に放送された。

パラボラアンテナの組み立て風景

その後１０次隊でテレビカメラマンがはじめて越冬して年間を通してフィルム取材をしたのに続いて、テレビは今を伝えるメディアであるため昭和基地から生中継をする計画が進められた。生中継にはパラボラアンテナをはじめたくさんの機材と要員が必要で、生中継が行われた第２０次隊（１９７８年～）が運んだ放送機材は３０トンに及んだ。しかも７８年は氷が厚く昭和基地の手前７０キロからヘリコプターで空輸しなければならなかったが、「ふじ」の乗組員や観測隊の協力でやっとパラボラアンテナが建設され、１９７９年１月２８日昭和基地から初めてのテレビ生中継放送が実現した（写真参照）。これは世界でも初めての南極地域からのテレビ生中継であり、越冬した隊員と東京にいる留守家族が初めて生中継を通じて対面した。

２００３年は日本のテレビ放送開始５０

周年に当たり、昭和基地の近くで皆既日食が見られる年でもあったため、ＮＨＫは越冬をして年間を通して生中継することになった。この生中継は初めてハイビジョンの鮮明な映像で行われ、特に２００３年１１月２４日には皆既日食帯にあるロシアのノボラザレフスカヤ基地、昭和基地に近いペンギン・ルーカリー、そして皆既日食帯上空を飛ぶジェット機の３か所から多元中継で白い大陸の黒い太陽が生放送された。またオーロラの中継、日本の観測隊がいち早く見つけた南極上空のオゾンホールについての専門家の解説なども放送され、１年間で生放送は１５３回に達した。

今後は何がテレビ放送の対象になるか。これについてはまず昭和基地と日本の間の通信事情が画期的に改善されたことを考えなければならない。今では通信衛星で常時インターネット接続でき、動画の伝送もできるようになった。テレビ会議システムを使って南極教室がたびたび行われ、昭和基地の現在の姿が静止画でいつでも誰でも見られるようになっている。今後放送の方がネットの映像を利用することも出てくるだろうし、地球温暖化の定点観測地点としての役割に加えて、何が日本の南極観測の焦点になるか、将来ビジョンとのかかわりを考えていく必要がある。

南極観測と報道

―彩った人々とこれからの課題―

第７次、第４７次同行記者
柴田鉄治氏（元朝日新聞記者）

日本の南極観測を語るとき、報道の役割を抜きにして論じることはできない。南極観測への参加は、ただ単に国際地球観測年（ＩＧＹ）の国際協力活動に参画するというだけでなく、敗戦に打ちひしがれ、ひたすら復興に励んできた国民に対して、日ごろの閉塞感を吹き飛ばし、夢とロマンを与える画期的な行事だったからである。

そもそもの発端からして、報道がらみ、朝日新聞社の提唱で動き出した企画だったのだ。言い出したのは、同社の矢田喜美雄記者で、１９５５年３月、「北極と南極」という連載記事を取材していたとき、ＩＧＹの活動の一つとして各国が協力して南極観測に挑もうという計画が進んでいることを知って、「日本も参加できないだろうか」と考えた。

矢田記者は、そのアイデアを当時の朝日新聞社の事実上のトップ、信夫韓一郎専務に伝えたところ、「それは面白い」とすぐ乗ってきた。信夫専務は、同社から出している科学雑誌「科学朝日」の編集長、半沢朔一郎氏を呼び、矢田記者と二人でさらに詳しく調べるように指示した。

矢田喜美雄記者

二人はまず、日本学術会議会長の茅誠司氏、ＩＧＹ特別委員会日本代表の永田武・東大教授を訪ねると、両氏とも「私たちは、とても行かれぬと諦めていた。朝日新聞が応援してくれるなら願ってもないこと。ぜひ実現させたい」と賛同してくれた。他の学者たちもみんな賛成で、一気に実現に向けて動き出したのである。

のちに朝日新聞社内に設けられた南極事務局の事務局長を勤めた半沢氏が、「矢田記者と信夫専務と茅会長、この３人がいなかったら日本の南極観測は生まれていなかっただろう」と語っていたのを聞いたことがある。

南極観測をやろうと思いついた矢田記者という人は、いつもユニークな発想をする型破りの社会部記者で、下山国鉄総裁が轢死体で発見された戦後の難事件、下山事件でも数々のスクープを連発した名物記者だった。

学生時代、走り高跳びの選手としてベルリン・オリンピックに出場し、５位に入賞したという輝かしい実績を持ち、その後、小学校の教員を経て新聞記者になったという変り種でもある。

敗戦後のまだ貧しかった日本が南極へ観測隊を送り出すというのは、まさに破天荒の企画であり、「翔んだ男のとんでもない発想」がなかったら生まれなかっただろうと、いわれたものだ。

矢田記者の提案にすぐ乗った信夫専務という人も型破りの新聞人だった。敗戦後の国民を元気づけるのに最適の企画だと見破った眼力はなかなかのもので、学者を集めた会合で「日本の曇り空にみなさんの力で大きな青い窓を開けてください」と挨拶したことにもそのことが表れている。

矢田記者の最初の考えでは、朝日新聞社が船をチャーターし学者たちを乗せて行くという構想だったが、そういうわけにはいかず、国家事業にならざるを得なかった。とはいえ、南極に詳しい官庁などはなく、裏方の準備作業はほとんど朝日新聞社がやった。最初の予算要求も、その原案は半沢、矢田両記者が徹夜で作成したものだったといわれている。

こうして国民の熱狂的な声援のなか日本の南極観測事業がスタートしたのだが、朝日新聞社の支援活動は、物心両面にわたって大きなものだった。読者に募金を呼びかけるとともに自らも１億円を寄付、また、１次隊の「宗谷」に積み込まれた小型機「さちかぜ」も、随伴船の「海鷹丸」に積まれたヘリコプター「ペンギン号」も朝日新聞社の社機で、パイロットや整備員も同社の航空部員が担当したのである。

昭和基地が建設され、第１次越冬隊１１人が南極で１年を過ごしたが、そのなかの２人、報道・設営担当の藤井恒男隊員と通信担当の作間敏夫隊員は、朝日新聞社員だった。藤井氏は帰国後、全国を講演して回ったが、「南極で小便をすると、そのまま氷のツララとなる」といった真っ赤なウソをまじえて聴衆を煙に巻く愉快な人だった。

このほか、南極からの報道に当たった高木四郎（１次）疋田桂一郎（２次）山本武（３次）犬塚堯（４次）…といった記者群像も、多彩な、いや多才なユニークな人々である。

報道の提唱によって生まれ、報道に支えられて発展してきた日本の南極観測――これからの課題を考えるとき、報道の役割はますます重要になってくると私は考えている。

というのは、地球と人類の未来にとって最も大切なことは「世界の平和」と「地球環境の保全」であろう。この世界平和と地球環境を守るカギは「南極」が握っていると思うからだ。

南極は、６１年に発効した南極条約によって、地球で唯一の「国境もなければ軍事基地もない」平和な地である。南極では各国の基地を訪ねるときパスポートもビザもいらないし、科学観測では各国が協力し合っているのだ。

世界中が南極のようになれば戦争なんか起こらなくなろう。たとえば、南極条約ができる前には領土権を主張していた英国とアルゼンチンとの間で旗を奪い合うようなトラブルもあったが、いまや南極大陸は人類の共有財産となって、領土権争いなどは存在しない。

日本と韓国の間で領有を争っている竹島なども、南極条約の知恵を借りれば簡単に解決するに違いない。

一方、「地球の病気はまず南極に現れる」という言葉があるように、南極は地球環境のバロメーターであり、南極観測の重要性はますます高まっている。南極は世界で最も環境保全の厳しい地域となっており、環境を守るために資源開発まで禁止しているのである。

南極とは対照的に、地球温暖化で氷の減っている北極がいまとても生臭くなっている。ロシアが海底に国旗を立てたり、カナダが北西航路の通行権を主張したり、しているのだ。北極にも早く南極条約のような取り決めをつくる必要がある。

こうした南極の素晴らしさを人々に知らせ、世界に広げていくのは報道の役割だ。敗戦後のあの時代に南極観測への参加を提唱し、国民を元気づけた報道が、今後は地球と人類の未来のために、「世界中を南極にしよう」「愛国心ではなく、愛地球心を」と、次代を担う国民に訴えていくことを期待したい。

南極関連情報

旧しらせ〝第二の船出〟

２００８年に退役した先代の南極観測船「しらせ」（砕氷艦）は気象情報会社ウェザーニューズ（本社･東京都港区）に譲渡されたが、気象変動や地球環境などの情報をモリタリングして広く発信する活動拠点「ＳＨＩＲＡＳＥ」として〝第二の船出〟をすることになった。

現在の係留地は千葉県・船橋港の船橋京葉食品コンビナート南埠頭（船橋市高瀬町２番地先、サッポロビール千葉ビール園前）。最寄駅ＪＲ京葉線新習志野。

５月２日（日）午後１時から「ＳＨＩＲＡＳＥ」内のヘリ倉庫でグランドオープンセレモニーが開かれ、続いて船内見学などが行なわれた。

旧しらせは、昨年１０月同社への譲渡決定、海上自衛隊の横須賀港で引き渡され、検査や補修を終え、今年３月末船橋港に曳航されてきた。

「ＳＨＩＲＡＳＥ」についての問い合わせ先は、
株式会社ウェザーニューズ・
ＳＨＩＲＡＳＥプロジェクト
電話（０４３－３５１－５００２）

連載「時は巡り」⑦

第１次越冬隊の通信を担当して

作間敏夫（第１次越冬隊員、通信担当）

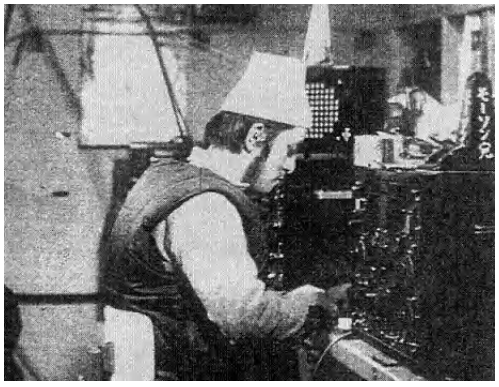
通信とはどういう意味なのかを辞書で調べてみると「電信、電話、郵便、インターネットなどによってさまざまな情報をお互いに送受すること。さらに、その内容自体をも示す」とある。１次隊の頃にはインターネットはなかったが、辞書にある通り外界との接触を意味し、通信を担当する通信士は全ての情報を知り得る立場にある。

西堀越冬隊長以下１１人の第１次越冬隊のなかで、通信担当は私一人だったから、全ての情報を占有できる状況にあったといえよう。とはいっても、通信担当が情報を真っ先に知るというだけで、外界から隔絶された僅か１１人の集団生活なのだから、どんな情報もすぐ全員に知れ渡るという状況ではあった。

第１次観測隊は、１９５６年（昭和３１年）１１月８日に盛大な見送りを受けて晴海港を出航した。観測船「宗谷」は相当な老朽船。ちょっとした波にもまるで盥のように揺れる船だった。山には強い「つわもの」ぞろいの隊員たちも、船酔いには弱い。船内で毎日発行された「南極新聞」に「船酔い番付表」が発表され、船酔いが激しかった私は「三役」に名前が載った。それが内地にまで報道され、家族が読んだらなんと思うかと苦笑せざるを得なかった。

「宗谷」がオングル島の西方２１キロの地点に着岸したのが５７年１月２５日。そこから氷上を昼夜を分かたずの輸送が始まった。輸送と並行して昭和基地では建物やアンテナ塔、発電機の据付など、建設作業が始まり、隊員も乗組員も全員が不眠不休の戦場のような状態だった。そんな中で、永田隊長からも西堀越冬隊長候補からも「必ず日本と直接交信ができる状態にして

ください」と要望され、とくに永田隊長からは「建物、燃料、食糧、その他の条件がすべて整っても、日本との直接交信ができなければ越冬を許可できない」といわれ、私の緊張感は高まるばかりだった。半分ほど出来上がった無線棟の中で、約１週間、昼夜兼行の作業の末、銚子無線局に対する何回目かの呼び出しに「感度良好」の応答があって、ようやく直接交信に成功したのだった。



昭和基地での通信中の作間敏夫隊員

こうして昭和基地での初めての越冬生活がスタートしたが、男ばかり１１人が、外界と隔絶された環境で集団生活を営むことになった状況を想像してほしい。ほとんどの人が初対面に近い関係で、この集団と外界との接点は「通信」のみである。このような環境では、人間は、自らは本能的に身構えつつ、まずは相手の人柄を知ろうとするものである。

「猫かぶり」という言葉がある。本当の自分を包み隠して、実体とは別の自分を見せようとする行為を指す言葉だ。私も最初は軽度の猫かぶりの状態だった。しかし、長期間、自分の正体を隠し続けられるものではなく、猫かぶり現象はすぐに消滅していった。とくに私は、一日１０時間、無線棟で機器と向き合う日々であったため、急速に本来の自分に戻っていった。さらに、私にとって運のいいことに、気象担当の村越望隊員と旧満州の新京一中の同期生であることが越冬開始直後に分かり、奇遇に手を取り合って喜び合ったのだった。

泣いても笑ってもこれから１年間、外からの援助なしで全員無事故で切り抜け、生きて帰国しなければならない。みんな、己を殺して協力し合わなければ、という自覚がしだいに全員に浸透していったのだ。

「幸運の第１次越冬隊」と呼ばれる所以も､みんな裸になって､｢赤裸々な人間関係」が構築できたからだと私は確信している。

越冬中の通信関係の話題で思い出すのは、世界中のアマチュア無線家「ハム」との交信である。日本での流行の服装とか、はやっている言葉とか、話題の事件などの新鮮なニュースも、日本のハムの方たちから知らせてもらったし、また、世界中の珍しい話題も各地のアマチュア無線家を通じて教えてもらった。

南極ではミッド・ウインターに各国の基地の間でお祝いの電報を交換する習慣があることを誰も知らず、次々と舞い込む電文に、西堀隊長らと大急ぎで返信電文をつくり、送り返したことも忘れられない思い出だ｡そのミッド･ウインターの祝電の中に、フランスのアデリー基地から日本文で「私は今、谷崎潤一郎の本を読んでいます。なかなか面白い。日本へ行くので、きれいな日本娘を紹介してください」という電文があり、びっくりした。問い合わせると、エメリーさんという副隊長で、帰国後、東京で何回か会うという不思議な縁まであったのである。

第１次越冬隊のこうして果たした任務は、日本の南極史に消えない業績として残るものと、私はひそかに自負している。日本の南極観測参加が決まったとき、私の胸の奥に熱い血潮が沸きあがり、いち早く隊員志願の手を挙げた。いくつかの選考を突破して、第１次越冬隊員１１人のなかの１人に選ばれたことは、大変な幸運だった。私は生涯を通じて、昭和基地の１年間ほど気持ちが張り詰め、充実した毎日を送ったことはない。毎日、西堀隊長の薫陶を受け、生き甲斐とはどのようなものか、身をもって教えられ、私の人生は大きく変わった。

「どんなことでも先ずやってみなはれ！」「決してあきらめるな！」｢失敗したら別の形でやり直せ！」――この西堀主義を忘れることはできない。

第１次越冬隊が帰国して早や５０余年が経ち、西堀隊長をはじめ多くの隊員が彼岸へ旅立たれた。オングル島での初めての居住者として語り合える仲間は、２０１０年４月現在、村越、作間、北村泰一の３人のみとなった。彼岸に旅立たれた仲間のご冥福を心から祈る次第である。

南極関連施設・記念碑等の紹介

白瀬南極探検隊記念館の紹介

学芸員　石船清隆

白瀬矗（しらせのぶ）の肖像

日本人で初めて南極探検に挑んだ白瀬矗（しらせのぶ）の出身地である秋田県にかほ市は、平成１７年（２００５）１０月１日に由利郡仁賀保町・金浦町・象潟町が合併して誕生しました。日本海沿岸の秋田県南西部、山形県との県境に接し、東北地方で２番目に標高が高い、霊峰「鳥海山」（標高２，２３６ｍ）を南に望み、西には日本海、奥の細道で松尾芭蕉が訪れた「象潟（九十九島）」など、自然や貴重な文化遺産が多く、田園と各産業が調和した市で、四季それぞれに魅力があり、白瀬はここで生まれ育ちました。

白瀬矗と南極探検隊を顕彰し、資料の収集や調査研究を行う記念館の建設を求める声が高まり、平成２年４月に白瀬南極探検隊記念館が開館しました。今年で開館してから２０周年、入館者も平成２２年３月末現在で、５９万８千人の入館者となっており、間もなく６０万人に達しようとしています。

初代館長は白瀬矗の姪にあたる故白瀬京子氏、名誉館長には故村山雅美氏に就任いただいており、建設当時から指導助言をいただいていました。最高顧問には楠 宏氏に就任いただいており、当館の学術面に対する指導助言をいただきながら、現在まで運営しております。

白瀬南極探検隊記念館

当館は、平成１４年度にリニューアルを行ってから、現在の展示となっておりますが、子どもの頃から極地探検を志した白瀬矗と南極探検隊、そして南極観測事業、当館がオープンするまでの過程を「プロローグゾーン」の大スクリーンで紹介しております。「白瀬矗と南極探検隊ゾーン」では、白瀬矗の生家である浄連寺で保存していた資料を中心とした展示と南極探検を夢見た隊員たちに関連した資料、また同時期に南極点を目指したアムンセン、スコットの探検家たちによる命をかけた南極点到達レースの映像や実寸大に一部を復元した「開南丸」などを展示しています。「白瀬の夢を継ぐゾーン」では、日本の南極観測の歴史をわかりやすく紹介し、「雪上車展示ゾーン」では、昭和４３年（１９６８）１２月１９日、村山雅美隊長率いる第９次越冬隊による極点調査旅行隊が日本初の南極点に到達した雪上車「ＫＤ６０５」の実物を、当時

の勇姿のまま展示しており、雪上車に乗り込んで南極探検の気分が満喫できる体験ゾーンとなっています。また、「オーロラドーム」は音と映像を駆使して、北極と南極のオーロラ映像を映し出して、極地に関する紹介をしています。

白瀬記念館と南極公園

当館と隣接している南極公園には竹嶋潟があり、風がない日には水面に鳥海山が映し出され、桜並木やつつじなど景観の良い場所として、県内外から訪れる、憩いの場となっております。

また、今年は白瀬矗が南極探検に向けて、東京芝浦埠頭（現在の東京都港区海岸三丁目）を出航して、ちょうど１００年に当たります。秋田県とにかほ市などで組織する白瀬日本南極探検隊１００周年記念プロジェクト実行委員会では、今年、さまざまな事業を行います。９月１０日（金）～１２日（日）の日程で、秋田港に南極観測船「新しらせ」が寄港するイベントの開催や、南極探検船「開南丸」出航１００周年に関連した企画展などを予定しておりますので、今後とも是非ご注目ください。

（白瀬記念館へのアクセス）
最寄の駅：ＪＲ羽越線金浦駅
交通：バス停・金浦駅前角乗車
白瀬記念館入口下車（徒歩３分）

連載　支部便り⑦　(沖縄支部)

渡辺興亜氏の講演（沖縄県立博物館・仲里健氏撮影）

南極 OB 会沖縄支部は，木崎甲子郎琉球大学名誉教授（４冬・２１夏隊長）を支部長とし，大城智氏（３９冬）を幹事長として平成１８年６月頃に発足しました．沖縄は離島を含む島嶼県で，石垣島，宮古島，伊平屋島などに居住されている会員もいます．これに加えて，発足時に海上保安庁，気象庁など官庁に勤務されていた会員が多かったのですが，その後の人事異動で入れ替わりも多く，定期的に集まりを持つことが難しい状態です．発足後の数年間は定期的に懇親会を行っていたことを木崎支部長より伺っておりますが，ここ数年はとりたてて活動はしていませんでした．

そのようななか，２００９年８月２２日に南極講演会が，沖縄県立博物館・美術館文化講座「南極の人と自然」として開催されました．講師には南極観測隊 OB の渡邊興亜氏（１１冬，１５冬、２９冬、観測隊長，３５観測隊長），沖縄出身の奥平文雄氏（１３冬，２６冬）をお招きし，「我が国の南極観測５０年」「前人未到のドーム頂上を目指して」というタイトルで，ドームふじ

基地建設までの長きに渡る南極活動と，その世界的に注目される研究結果についてご講演頂きました．盛夏の沖縄で見る南極の美しい風景は見るものを圧倒する迫力と清涼感があり，また，一般の方々にもわかりやすい言葉で講演をおこなって頂きました．休憩時間に展示された南極の氷は，老若男女問わずの人気で，氷に閉じ込められた太古の空気に参加者は感慨深げでした．

奥平文雄氏の講演（沖縄県立博物館・仲里健氏撮影）

講演会終了後の懇親会は，木崎支部長が隊長を務められた第２５次隊が企画された２５周年記念会と合同で開催させて頂ただきました（正確には３名の沖縄支部会会員が便乗させていただく形でした）．全国津々浦々（最遠は稚内）から沖縄に集結された１５名を超える２５次隊の皆様から，鮮明に記憶された観測当時の逸話をご披露頂きました．とても２５年の月日が経過したとは思えませんでした．木崎支部長を中心とした南極観測隊員の結束の強さを実感した次第です．木崎支部長はご存知の通り，数多くの著書を執筆されていますが（南極関連では「南極大陸の歴史を探る：岩波新書」「南極航海記：築地書店」など），現在は油彩画家としてご活躍されています．南極やヒマラヤをテーマにした作品が多く，沖縄や東京で定期的に油彩展を開催されていますので，興味のある方は是非どうぞ．写真とは違った南極を満喫できると思います．

本講演会周知のため，多忙な大城幹事長の代役として，これまでの支部会名簿を引き継いで連絡を試みましたが，多くの方が異動されていました．沖縄は他県から移住される方の多く，退職後はのんびり沖縄で過ごされる南極 OB 会員も居られるかもしれません．先ずは沖縄支部の新住所録作成を目指しておりますので，沖縄在住の OB 会員の皆様は，下記までご連絡頂けますと幸いです．

〒903-0213 沖縄県西原町千原一番地　琉球大学教育学部自然環境科学教育コース
馬場壮太郎　（外国共同，49 夏）
(e-mail: baba@edu.u-ryukyu.ac.jp)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

受賞

日本雪氷学会　功績賞：前　晋爾
件　名：雪氷物性研究の発展および学会運営に果たした多大な貢献
日本雪氷学会　功績賞：渡辺興亜
件　名：南極・ヒマラヤ等の極地科学開拓と学会の発展推進に果たした多大な貢献
日本雪氷学会　学術賞：横山宏太郎
件　名：降水量計の捕捉率と冬期降水量の評価

会友承認

石原摩希（講話会一般参加者、南極大好き乙女）
関根忠雄（講話会一般参加者、いなぎＩＣカレッジ参与）
竹内宏美（講話会一般参加者）
新野愛子（講話会一般参加者）

訃報

桑島　清　2009.8.23　海自
高橋 理一 2009.11.12　１次、２次宗谷乗組員
河野博之　2010.1.22　１次、２次宗谷乗組員
竹内秀一　2010.3.5　海自 23 次、24 次しらせ艦長

＊＊＊　広報委員会からのお知らせ　＊＊＊

昭和基地からの初めての「南極授業」が行なわれました。このプロジェクトに関係された３人の方の原稿を頂きました。

この会報は第１０号で、２０１０年度の最初の会報です。今年度も３回発行の予定です。振込用紙を同封しております。「通信費」の納入を今年もよろしくお願いします。

＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第４回講話会の講師陣（左から深瀬和巳氏、隈部紀生氏、柴田鉄治氏）

****

南極 OB 会事務局　〒101-0065　東京都千代田区西神田２－３－２牧ビル３０１
電話　：03-5210-2252　FAX　：03-5275-1635
E-Mail　Address　：　nankyoku-ob@mbp.nifty.com
南極 OB 会ホームページ　：　http://www.jare.org /

****